

彙
報

目次

研究活動……………5

昭和四十七年度研究計画……………27

所員動静……………38

研究活動（昭和四十一年度—四十六年度抄録）

A 部門研究

一、汎アジア経済部門

——低開発国経済発展の基本過程——

教授 川野重任、助教 山田三郎、非常勤講師

鈴木忠和、研究担当 逸見謙三、研究委嘱 滝川 勉、

荻原宜之、館齋一郎、古賀正則

昭和四十二年度は「アジアにおける経済発展と政治に関する研究」（東アジア法律・政治部門との共同研究）、四十三・四十四年度「経済発展の基本過程」、四十五・四十六年度「低開発国経済発展の基本過程」をそれぞれ主題とする共同研究として行なった。

四十二年度はアジアにおける経済発展と政治のからみ合いの研究を志したが、研究参加者の限られた人員構成からして、同一対象地域について経済、政治の両側面から問題を分析検討するというわけには行かなかった。経済面については台湾（川野）、セイロン（橋本）、フィリピン（滝川）、マラヤ（荻原）の経済発展の特質の分析がとり上げられた他、それらを相互に結ぶ経済関係として農産物貿易の構造と動向（逸見）の分析がとり上げられ、政治面については、中国（坂野、衛藤）、タイ国（関）の政治過程がそれぞれ研究の対象とされた。

四十三、四十四年度においては、研究を経済面に限定し、主題を経済の「基本過程」におくこととした。その意味は研究対象としては、前年度に引続きアジアの各国をそれぞれ分担するが、各国の発展を規制し、支持する基本条件を共通のものとして把握しようというにある。この場合、とくに工業化については、輸入代替の促進とその進行とを基本コースとしてとらえようとしたことは後述の通りである。なお、研究者として新たに加わった山田は四十三年度はマラヤ経済の基礎としての多元性

の分析、四十四年度においては韓国の工業化過程の分析を担当した。

四十五、四十六年度においては、共通課題に「低開発国経済発展」という形で前年度この課題をややしぼった形にしたが、アジア以外の他の低開発諸地域との比較検討をも含み得るという趣旨での問題設定であるが、具体的研究の遂行については、原則的に地域別研究の担当という従来の方針を踏襲した。地域別研究としては、新たにインド（古賀）の研究が加わり、新参加の鈴木は国別研究を越えて「東南アジア農業発展の型」を課題とし、館も亦「低開発国における人口問題と経済発展との交渉関係」を研究事項として担当することとした。川野は「低開発国農業発展の条件」として問題を一般的な形でとり上げ、その中でアジア地域の特質を明らかにすることを課題とした。

このようにして、研究課題は多角的であるが、主任（川野）としてとくに強調してきた問題設定の視角は次の通りであった。アジア諸国のはほとんどは第二次大戦後政治的独立をかちとった国々であるが、その経済発展は、（一）戦前の本国——植民地

の経済循環はいかにたち切られたか、（二）新しい経済循環はそのプラス、マイナス面の上にかに、そしていかなる戦略を通じて展開されたか、その場合の問題は何であったか、などである。そして多くの国で、戦前の蓄積の継承の上にその発展がなされ、とくに工業化については輸入代替という形でその推進がはかられつつあることを見た。他の研究グループとの研究成果であるが、川野は笹本武治氏とともに「台湾経済総合研究」、また、「The Reasons for Taiwan's High Economic Growth Rate」においても同様にこの視点から台湾の工業化を分析した。

山田は「韓国工業化の課題」をすでに世に問うた。

二、汎アジア人文地理学

教授 大野盛雄、助教 高橋 彰

アジアを理解する手だてとして、とぎすまされたメスがふるわれるように、きわめて専門的な分析の視角から鮮明な断面をえぐりだすことが望まれるとともに、同時に諸現象の錯雑した実態を多角的、総合的に判断する視角を課題としてもつのが人

文地理学の立場であらう。

こうした前提に立って大野は、人間集団が自然に対決することによってくりひろげられる生産、生活の営みの再生産の総過程を拡張した生活様式論としてとらえるという立場から経済過程、社会過程、文化過程の総合的把握を試みようとしてきた。さらに、この生産、生活の営みの再生産の総過程の実現の場がきわめて端的に村落という形で現われることから、この視角は同時に、具体的には農村研究という方向をとらせることになる。

「アジアの農村」「西アジア農村の人文地理学的研究」の両共同研究は、こうした前提の具体的な活動ということになる。またこの生活様式の比較研究は、比較文化論の展開となった。

高橋は、人文地理学における地域研究の方法を、地理学における外国研究の展開、諸科学における地域概念の比較、地域的諸現象の相互関連性における把握叙述としての地誌学、地域研究における村落研究の役割、パーソナルヒストリーの利用、価値体系と基層文化、環境の取扱ひ、方法としての地図化、地域性叙述における表現の問題等の諸側面から追求してきた。

三、汎アジア文化人類学

教授 中根千枝、助手 青木 保、研究委嘱 原 忠彦、
玄容駿、奨励研究員 末成道男

本研究班は昭和四十一年以来、主としてアジア地域を対象とする文化人類学研究を中心として構成され、泉靖一または中根が主任をつとめてきた。班研究の再編により、昭和四十三年度より文化人類学部門の研究という形をとるようになったが、実質的にはそれ以前の、中根を主任とした研究班と密接なつながりをもっている。すなわち、昭和四十一年度には「アジア地域における社会組織と宗教」、また昭和四十二年度には「ユーラシア大陸における社会組織の比較研究」と題して、とくに社会組織を中心としたアジア諸地域の比較研究を行ない、中根、泉のほか研究担当として、村上正二、白鳥芳郎、大林太良、神田信夫の諸氏が加わり、それぞれ専門とする朝鮮、チベット、モンゴル、華南、インドシナの諸民族社会の研究をもととし、たんに文化人類学のみでなく歴史的研究の成果を交錯させること

により、興味ある問題提起が行なわれた。

昭和四十三年度以降は部門研究班ということになって、文化人類学中心となると共に、助手の松谷敏雄、青木保、また研究担当として原忠彦、末成道男が加わり、さらに昭和四十六年度には研究委嘱として玄容駿が加わった。(主任は昭和四十三年四月より泉であったが、その急逝により四十五年十一月より中根となった)。関心は社会組織にとどまらず、広く「社会集団の基本構造」(昭和四十三年度)「文化人類学の方法の諸問題」(昭和四十四・四十五年度)というようになり、文化人類学のなかでも各人が異なるアプローチを提示することによって方法論の問題を掘り下げようとした。このような中で、各研究者はそれぞれの分野でも精力的な研究を続けてきた。すなわち、泉は野外調査の方法を、中根は歴史のある社会のエリート集団の構造を、松谷は物質文化をとおしてみた文化の研究方法を、青木は近代から現代への社会、文化理論の検証を、原はイスラム社会を対象として家族研究の方法を、末成は台湾、韓国を対象として地域社会における親族集団の位置づけを、玄容駿は韓国

における家族と宗教の関係の研究をそれぞれ主たるテーマとしてすすめてきており、班研究としては異なる方法論の検討、批判をとおして文化人類学の諸問題を掘り下げることが試みてきた。

四、東アジア政治・法律——中国をめぐる国際政治——

教授 関寛治、研究担当 坂野正高、衛藤藩吉、

研究委嘱 藤井昇三

本研究班は、近現代中国の政治過程を国際環境の中で把握することを目的としている。坂野は、近代中国における中国外交の行動様式を歴史的・政治学的方法を駆使して分析し「近代中国外交史研究」なる著書を刊行した。衛藤は、近代中国の政治史および日中関係に関してとくに考究し、「近代中国政治史研究」および「東アジア政治史研究」の二つの著書によってその成果を発表した。また、関は藤井とともに、一九二〇年代の「日本帝国主義と東アジア」に関して共同研究を発表し、藤井は、

ワシントン会議と中国の民族運動」あるいは、中国の側からみたワシントン体制の意義「『平和』からの解放」について考究した。

五、東アジア歴史

——東アジアの変革期における権力とその基盤——

教授 佐伯有一、助教授 池田 温、助手 浜島敦俊、
非常勤講師 堀敏一、研究担当 関野雄、西嶋定生、古
島和雄、研究委嘱 西川正二、菅沼正久、姜徳相、梶村
秀樹

本研究班は、歴史も古く、テーマ・構成員にも幾多の変遷があった。しかし、出発以来、どちらかというと、旧中国の分析に力点がおかれていたが、昭和四十一年度から二年に亘って、意識的に近現代中国の分析に力を注ぐ努力がなされ、さらに最近は、古代から現代までを通して分析すること、および、旧中国の発展の歴史を東アジアという広い枠組のなかで相対的かつ

適切に位置づけることを目標にし始めている。このような経過の中で、小倉芳彦、柳田節子、小山正明、田中正俊、小島晋治、石田米子、中村義、野沢豊、平野絢子、本橋渥の各氏にそれぞれ協力して頂いた。小倉は、この間、主として左伝の思想史的分析を通じて、多くの事実復元を行ない、方法・実証の点で全く新しい局面を開いて、「中国古代政治思想史」の著作を出した。柳田は、一貫して、宋代の主戸・客戸問題を追求するとともに、形勢戸の存在形態と機能を明かにすることによって宋代官僚制形成過程に独創的な見解を固めつつある。小山は、明代における税役体系を通じて、社会経済構造を明かにする作業を続け、糧長制度の検討、十段法の発生と展開、およびその歴史の意義についても解明を行なった。田中は十九世紀中国のいわゆる解体過程を、棉業を通じて分析し、同時に、その半植民地的な半封建社会の発展史的把握について実証的方法的な解明を行なった。小島は、太平天国革命の多面的な分析を充実させるとともに、人民解放軍の歴史的研究も行なった。石田は、太平天国革命運動のとらえ方について若干の問題提起を行ない、中

村は、洋務運動と変法運動との関連について、いくつかの論文を出した。野沢は、孫文、辛亥革命についての長年の研究の一応のまとめの段階に入り、二つの著作を世に問うた。平野は、現代中国における地代問題と、工業の地域分散化の問題などに理論的実証的分析を加え、本橋は、中国の工業化と朝鮮の工業化の比較研究などを行なった。古代から現代を通しての班編成を行なってからの構成員は、より広い枠組で問題追求を行っており、関野は秦以前の経済機構につき年来の研究を続け、西嶋は、古代の支配の歴史的性格を追及するとともに、日本との関連での政治史的な構図についても問題提起を行ないつつある。池田は、日本と中国における均田制の比較検討を目指しているが、当面「律令官制の形成」について考察し、堀は、唐代の貴族制が、いわゆる歴史とともに古い官僚制と決定的に異なる点を明らかにするため、貴族と郷党社会との関係を分析し、「九品中正制度の成立」「貴族制社会の成立」などの論考を公にした。佐伯は、明代における織工の叛乱（一六〇一）を通して、明末社会の一側面を明かにしようとする未完ながらその一端を公表

した。また浜島は、水利および役法改革を通じて、共同体の存在形態とその変化についてとくに国家権力との関係において論考を発表した。西川は、ひきつづき、辛亥革命における革命の構造分析を行ない、古島は、革命前の農村社会と革命後の農村社会を一貫してとらえる試みに努力を傾けている。菅沼は、人民公社、教育、工業化など多角的な方面から精力的な分析を行ない、「中国の社会主義」の歴史的な性格を明らかにするための実証的具体的な研究を行ない、併せて毛沢東思想の本質にも分析の眼を向けている。また、梶村は、朝鮮の封建社会の解体、植民地化の経済構造分析のため、メリヤスその他織物業分析を発表し、姜は、三・一運動から、さらに共產主義者を先頭とする新しい運動の展開につき、豊かな資料蒐集の成果を公けにし、いくつかの論考を発表している。

六、東アジア美術史・考古学——宋元仏画の研究——

教授 鈴木敬、講師 戸田禎佑、研究委嘱 川上濤、
浜田隆、海老根聰郎

本研究班は、はじめ「中国絵画の伝統と創造」という主題をかかげて組織され、各人がそれぞれの分野で、伝統と創造の関係を解明するという立場をとっていたが、四十三年、より集中的な研究課題である「宋元仏画研究」を共通の主題とするよう再編され、従来のメンバーに海老根、浜田が新たに加わった。

「宋元仏画研究」の研究対象である宋元仏画「特に羅漢図・十王図」については、従来学問的関心が比較的薄かったが、これらの諸作品は、現存遺品の数からいっても、中国絵画史研究の重要な素材であることは疑いなく、制作期についての決定的な基準作例の極めて乏しい宋元の人物画、山水画、花鳥画の研究を、仏画の画の中にみられる人物、山水、花鳥表現の面から検討することが可能であり、これが日本における中国画研究者によせられた外国人研究者からの大きな期待の一つでもあった。

従って本研究は、まず日本各地の寺院が収蔵する絵画の調査を実施し、研究素材の集積につとめた。

一方、かかる資料集積作業のかたわら、これらの資料を用いた研究も班員によって進められている。鈴木は、元代李郭派の

山水画の研究、あるいは明代浙派の山水画の研究で、宋元仏画の画中国画にみられる山水表現を資料として活用し、遺品の少ない浙派の先行様式の解明を行ない、また宋元仏画がもつ元代絵画史研究への不可欠性を強調した。戸田は、宋元仏画の中にみられる様々な人物表現の混在に、中国絵画史の底流としての意義を見出し、さらに明代文人画系人物画の様式的源泉がここに存することを指摘した。川上は宋元仏画中、年記のある作品（主として禅僧の賛のあるもの）を宋代史年表の資料として活用した。浜田は、宋元仏画とその影響下に作られた日本仏画の多様なパターンを系統的に整理、分類することを行なっており、海老根は、特に禅宗関係の資料を捜訪することによって、これら舶載された宋元仏画の中国あるいは日本における伝来関係に、より明確な様相を与えるべく研究を続行している。

七、東アジア哲学・宗教——中国の思想と宗教——

教授 窪徳忠、助教 鎌田茂雄、助手 江島恵教、
蜂屋邦夫、非常勤講師 塩入良道、泰本 融 研究委嘱

野田幸三郎

本研究班は中国宗教史、中国思想史、中国仏教史、インド仏教史などの諸分野にわたる研究者によって構成され、あらゆる角度から中国宗教の解明を目的としている。そのため仏道二教の文献・教理の基礎的研究をおこなうとともに、中国宗教史のもっとも重要な課題である仏道二教の交渉史の究明をめざしている。また一方、中国宗教が東アジアの周辺諸地域におよぼした影響を重視し、実態調査にもとづき、中国宗教の伝播と、その変容過程を明らかにしようとする試みつつある。

従来、全真教教団史の研究に従事してきた窪は、初期全真教の教団史を一応まとめて発表した。「中国の宗教改革——全真教の成立——」がそれである。そこには、全真教成立にいたる道教略史、および全真教と相前後して成立した真大道教・太一教の二教団の歴史をも概説しているが、「新道教——三教の合一——」もその関係のものである。全真教は、元代に仏教と論争事件を起したが、その原因となったのが「老子八十一化図説」

の作製である。該書は一端姦却されたといわれているが、同名の書が現存している。その編者についての考察も行なった（「老子八十一化図説について——陳致虚本の存在をめぐって——」）。「老子八十一化図説について——その資料問題を中心として」。

道教は、仏教から実に多くの要素を学び、それを活用している。その点についての指摘が、「道教」「道教と仏教」「北朝における道仏二教の関係」などである。ところで、北周の武帝が廢仏事件後に設立した国立宗教研究所ともいえるべき通道観については、従来、道教色がつよいというのが通説であった。けれども、道教側の資料によるかぎり、そのようにいうことはできないと指摘したのが「北周の通道観に関する一臆説」である。このことからでも明らかのように、中国宗教を研究する場合には、ある一方に偏することなく、他の宗教宗派との比較研究が必須の条件のように思われる。今後も、本研究班は、その方面に注意を払いつつ研究を進めていきたいと考えている。

蜂屋は、四十三年入所以降、中国宗教史を思想史の一環として見る立場に立って、まず金代新道教の一つ全真教の教理研究

に従事した。かたわら、小人数のグループにより「丹陽真人語録」を、ほぼ二年かけて解釈しおえた。ついで「洞玄金玉集」を若干問題とし、四十六年五月から「重陽真人金闕玉鎖訣」の解釈に着手した。さしあたり開祖王重陽の思想の生成、展開と馬丹陽による整理、解釈の問題に注目している。

鎌田は、先に「中国華嚴思想史の研究」を公刊し華嚴思想の形成と展開を明らかにしたが、その後、華嚴思想の全体像の把握につとめ「中国の華嚴思想」を発表した。また華嚴教学そのものの構造的把握をめざし、考察を加えたのが「華嚴経普賢観行法門について」「妄尽還源観の思想史的意義」である。さらに日本華嚴学の綱要書ともいべき凝然の「法界義鏡」を、中国の華嚴学との対比をとおして究明したのが「中国華嚴学よりみた法界義鏡の特質」である。華嚴思想は禅思想の形成に大きな役割をはたしたが、その点を問題にしたのが「中国禅思想形成の教学的背景」である。そのほか仏道二教の思想的交流を問題とし、道教経典の成立におよぼした仏教思想の影響を説明し、「中国仏教思想史研究」を公刊した。その後の研究の成果の一部は

「道教経典にあらわれた唯心説」「玄珠録にあらわれた仏教思想」「初唐における三論宗と道教」「隋唐時代における儒仏道三教」である。なお現在は圭峯宗密の研究をおこないつつあり、その成果として「禅源詮集都序」が公刊された。また一方、中国仏教の性格を巨視的に把握することにつとめ、中国仏教の成立と展開を、東アジア仏教圏の形成と関連させて考察を試みたのが、「中国仏教の成立」「中国仏教の展開と東アジア仏教圏の成立」である。

塩入は、中国仏教における禅観を研究するにあたって、禅経典の伝訳と、そこに述べられた種々の禅観が如何に中国に受容されたかを究明し、天台智顛が禅観を批判整理して、これを止観の称で教義つけた点を明らかにした。その研究の一端を発表したのが「空の中国的理解と天台の空観」「天台行位説形成に関する諸問題」「天台思想の発展」である。仏教儀礼の研究成果として「中国仏教における仏名経典の性格とその源流」を発表したが、「入唐求法巡礼行記」の補注においても中国仏教儀礼を解明した。さらに一歩進めて本尊論を問題とし、「本尊論

雜考」「国分寺のいわゆる本尊について」を発表した。

泰本は、先に公刊した「中観論疏」の原典研究にひきつづき、「八不中道をめぐる諸問題」「八不中道の根源的性格」によって隋唐時代に活躍した嘉祥大師吉藏の中観思想の根本問題を解明した。ついで、あらたに唐宋時代における仏教論理学の受容形態を手がかりとして中国的思惟の特質を検討するとともに、わが国古代における仏教論理学の諸文献を調査し、中国との比較研究をも試みた。またインドの論理思想との関係をより明確にならしめるために、未開拓の領域であるダルマキールティの著「ブラマーナヴァールティカ（認識と論理に関する批判的注釈）」の原典解説を江島助手と協力して進めている。なお、比較論理学の現状を紹介し、その可能性を「比較研究の可能性」（講座東洋思想）において考察した。

江島は、インドの中観思想の展開を研究課題とし主に Bhāvaviveka に関する研究を進めてきたが、その成果を「Bhāvaviveka 研究——空性論証の論理を中心として——」やその他の諸論文によって発表し、空性と論理学との関連が Bhāvaviveka

において如何なるものであったかを明らかにした。そしてそれを手がかりとして、さらに後期中観思想、およびそれと他のインド哲学思想との関係等について、意欲的な研究を進めている。

そのほか本研究班では中国宗教の周辺諸地域におよぼした影響を解明しつつある。窪が関心をもったのは、外来文化の伝播と受容という問題であった。庚申信仰の日本への伝来を考えるべく全国的調査を行なったのは、そのためにほかならないが、「外来宗教の受容」「道教と日本」「文化の伝播と受容」などは、その成果の一端であり、「庚申信仰の研究——島嶼篇——」「猿田彦大神と庚申信仰」その他一連の庚申信仰関係の研究は、その日本における具体例である。けれども、ふしぎなことに、道教一色といわれている沖縄地方には、庚申信仰の片鱗も見いだされない。これは、日琉同祖同系論としては、大いに注意すべき点であろう。しかし、その反面、道教と多少とも関係のある習俗や信仰は、いまなお数多く見いだされる。昭和四十一年以来、それらの点について沖縄地方の実態調査を行なった結果の一部が「沖縄の道教信仰」をはじめとする一連の研究である

が、その集大成が「沖繩の習俗と信仰——中国との比較研究——」である。ただし、今日から見れば、増補改訂すべき点が多いので、なお一、二回の調査を行なったのち、改訂版の出版を考えている。なお鎌田も中国仏教が周辺諸地域におよぼした影響を問題として、沖繩・台湾などの実態調査をとおして、中国仏教圏の諸特徴の解明を試みつつある。その成果の一部として「台湾の仏教儀礼」(一)(二)が発表された。なお、本研究班に属していた野田幸三郎氏は、四十六年五月七日に急逝された。生前の真摯な研究態度を追想しつつ、謹んで哀悼の意を表したい。

八、東アジア文学——中国の思想と文学——

教授 尾上兼英、助手 山之内正彦、非常勤講師

高田淳、丸山昇、研究委嘱 西川喜久子

本研究班は昭和四十四年に編成を変更し、上記のメンバーで「清末民初の革命思想と運動」と「一九三〇年代文学の諸問題」に焦点をしばり、前者は高田、西川および溝口雄三、西川正二

の各氏の協力を得、後者は尾上、丸山が担当して、現在も継続中である。

それ以前は、従来の研究の継続として、盛唐から中晩唐に及ぶ詩の研究を、研究担当の前野直彬、助手の山之内正彦、宋元明清の小説を尾上と研究委嘱の木山英雄、戯曲は研究委嘱の田仲一成、清末から現代に至る思想の展開を高田、研究委嘱の野村浩一、新島淳良、一九三〇年代の左連結成とその運動理論を研究委嘱の丸山、竹内実が担当して進めてきた。

その間に、竹内は「中国の思想」「中国——同時代の知識人——」、新島は「毛沢東の思想」「新しき革命」「中国の論理と日本の論理」、高田は「中国の近代と儒教」「魯迅詩話」の著書を研究成果として刊行した。

また詩においては、山之内は「李商隱表現考・断章——戯詩を中心として——」、戯曲小説では、田仲が「清代蘇州織造と江南俳優ギルド」「明清華北地方劇の研究」、木山は「靈怪・神魔という世界」、尾上は「通俗文学」「明代白話小説ノート(1)」「山月記」の材源について、「庶民文化の誕生」の論文をそれ

ぞれ発表した。

再編後の研究班においては、清末民初の思想家のうち、嚴復・譚嗣同・章炳麟・魯迅に焦点を合わせた高田は、その成果として「シュウウォーツの敵復論」「敵復と西欧思想」「譚嗣同における『任俠』の思想」「戊戌・庚子前後の章炳麟の思想」「魯迅の復讐について」を発表し、近代化と革命思想の異質性と対立の様相を明らかにした。溝口は「孟子字義疏証の歴史的考察」「反宋学の道」「明末に生きた李卓吾」において、従来の「近代化」の視点に新たな問題提起をした。西川正二は「華北五代王朝の文臣と武臣」「四川保路運動——その前夜の社会状況——」において土地支配の権力形態の形成と解体を扱い、西川喜久子は「太平天国のたたかい」「太平天国運動」「太平天国運動と宗教」、及び翻訳解説を付した「太平天国」において、民衆的基督教、及び翻訳解説を付した「太平天国」において、丸山は盤に力点をおく研究成果を発表した。近現代文学では、丸山は「『周揚批判』問題覚え書き」「一九三五・六年の『王明路線』をめぐる——国防文学論戦と文化大革命——」「魯迅と日本人——その紹介・研究史に関するノート」を発表し、これら

を基礎に一九三〇年代文学の研究を重点的に進めている。

九、南アジア政治・経済

——インドにおける支配体制と社会構造——

教授 荒松雄、助教授 山崎利男、松井透、助手

長崎暢子、研究委員 中村平治

本研究班は、インドの各時代の政治、経済、社会、思想の構造を明らかにしながら、全体としてインドの歴史の展開・変貌を究明することをめざしている。

古代については、山崎は、四—十二世紀北インドで作成された約五〇〇の銅板文書を資料として、そこに記されている村落や土地の施与について若干の検討を行なった。また十一—十三世紀の研究未開拓の時期についても研究の手をのびし始め、諸王国の権力構造や領主層について解明を試みている。

中世については、荒は、「インド史蹟調査団」の報告書刊行の責任者として、遺跡総目録、墓建築、水利施設の三巻の編集

執筆に専念し、インド中世史の未知の資料の提示とそれを利用する政治、社会、思想の解明に努めた。同時に宗教と政治、社会との関係、とくにインドへのムスリムの浸透と、いわゆるムスリム支配の思想的、社会的背景について考察した。

植民地支配期については、主としてこの時代における社会経済的変動に関しては松井が、政治的変動——ことにシパーヒーの反乱——に関しては長崎が研究を行なった。松井は植民地支配の前提となるムガル期の社会的条件について問題を整理した上で、インド植民地化という現象の史的意味の把握に努力し、さらにイギリス帝国主義支配とインドの社会経済的変動との関係を具代的問題に即して究明する研究に着手した。なお以上の研究との関係で、松井は十九世紀経済史研究に関する方法的再検討を行ない、またイギリス人によって残された史料を用いるための布石として、イギリス人のアジア観、植民地支配論のあり方について史的検討を試みた。長崎は、近代インド史上重要な契機となるシパーヒーの反乱に関して、それを各地域毎に研究し、とくに反乱者側の諸勢力の関係のなかでそれを把えよう

と努力した。また反乱がそれ以前の歴史のなかから生み出されていく過程——思想的、政治的系譜——を探索し、さらに反乱がどのように民族運動に連なっていくかを解明しようと試みた。この研究において、各コミュニティ、とくにこれまでほとんど光をあてられなかったムスリムの行動と思想の究明に努めた。

現代インドを対象として中村は、J・ネルーの生涯と思想を同時代インドの発展のなかに位置づけることを目指した研究を昭和四一年に発表した。個別研究としては、関心を第一次大戦以後にしほり、ガンディーの政治指導の問題、インド民族運動と中国・日本との間の相関関係、および第二次大戦期の民族運動を統一戦線との関連で追究した。他方、昭和四十五年五月のセイロンでの政変、四十六年三月の東パキスタン問題について、歴史的な問題を若干提起した。また荒は、現代パキスタンの宗教と社会、政治の問題についても若干の検討を行なった。山崎も、ヒンドゥー教について、これまで知られることが少なかつた問題を中心として概論し、若干の問題を提起した。

十、東北アジア——親族組織と社会構造——

助教 松丸道雄、教授 中根千枝、研究委員

神田信夫、奨励研究員 末成道男

本研究班は、昭和四十三・四十四年度においては、橋本秀一を主任とし、姜徳相、梶村秀樹を加える三名で構成し、中国の東北地域と朝鮮を対象として、橋本は張作霖時代の経済構造研究、姜は一九三〇年代の朝鮮における民族解放闘争の歴史的研究、梶村は朝鮮民主人民共和国の農業を中心とする研究にはじまり韓国の経済政策の検討にまで及んだ。

昭和四十五年度は、班主任橋本の退官に伴ない、中根千枝を主任として、松丸道雄、神田信夫、末成道男とともに「親族組織と社会構造」の名のもとに、研究班の組織がえを計り、各種地域を専門領域とする研究者による班構成を行い、本テーマの效果的追及を目指した。

昭和四十六年度は、主任が松丸に交替した。この年度、この研究課題に関連して、中根はインド・マスリーのチベット避難

民キャンプにて実態調査を行ない、近くその成果は公表の予定である。また松丸は甲骨文・金文銘の根本的整理を行ないつつ、そこに現われる中国古代の親族称呼の検討を続行中であり、「殷周国家の構造」はこれに関連する問題についての見通しを含むものである。

十一、西アジア歴史・文化

教授 深井晋司、講師 中村広治郎、助手 松谷敏雄、

黒田和彦、佐藤次高

昭和四十二年度には、本研究所の西アジア研究体制は二班に区分され、「古代西アジアの民族と文化」班は深井を班主任として結成され、イスラーム研究を主体とする「西アジア研究」班は、大野を班主任として結成された。

「古代西アジアの民族と文化」班の追求する課題は、昭和三十一年以来開始されたイラク・イラン学術調査のもたらした基礎資料をもとに「人類文明の起源問題」と「東西文明の交流」

の諸問題を追求することにある。

曾野、松谷、池田、堀内は前者の「人類文明の起源問題」を考古、文化人類、人類学、建築史の立場から、新、黒田はメソポタミアにおける都市国家の問題を美術史、考古、歴史学の観点から、さらに増田、杉山、深井はイラン高原における文化交流の諸問題を考古、美術史の立場からそれぞれ追求した。

次に「西アジア研究」班の追求する課題は西アジアにおけるイスラーム研究にあり、飯塚教授の停年後、大野が班主任となつてイスラーム文化の中心地域を対象に、研究所の部門構成の欠を補うべく研究活動を行なつた。

すなわち、小口は宗教学の立場から「バハイズムの展開」を、加賀谷は思想史の観点からイランを中心に「現代イスラームの構造」の問題を、板垣はアラブ連合における現地調査をもとに「アラブ民族主義の史的展開」を追求し、大野は数年に亘るイラン農村の現地調査の資料をもとに人文地理、経済、社会学の立場から「イラン農村の社会経済構造」の問題を追求した。

昭和四十三年度には前年度の二研究班を「西アジア研究(1)」

並びに「西アジア研究(2)」と組み換え、「西アジア(1)」班は深井を班主任とし、「西アジア(2)」班は大野を班主任としてそれぞれ研究作業を行なつた。

それぞれの班の研究目的については前年度と大差はないが、人員構成については「西アジア研究班(1)」には石井が加わり、「西アジア研究班(2)」は大幅に増員されて、荒、佐藤、岡崎の三名が加わりイスラーム研究体制の充実が計られた。

昭和四十四年四月、本研究所に「西アジア歴史・文化」部門が新設され、研究所の部門構成の充実が実現された。従来の一研究班は統合され、深井が班主任となり、古代西アジアの研究からイスラーム期の研究までを含めることとなつた。

すなわち、小口は「西アジアにおける民族と宗教」の問題を、松谷は「人類文明の起源」の問題を、黒田、深井は前年度と同じ課題を、また佐藤は「初期イスラーム史」の研究を追求した。なお黒田・佐藤の両名は同年十二月同様の研究目的をもってイラク共和国バグダードに一年間の滞在期間で海外出張をした。

昭和四十五年度は中村が研究班に加わり、宗教学の立場から

「中世イスラームの神秘思想」の研究を担当、イスラーム研究の充実を計り、黒田は都合により四月に、佐藤は十二月それぞれ帰国した。

昭和四十六年度は四十五年度の研究目的をそのまま、同メンバーで継続することとなった。

B 共同研究

一、新興諸国の政治変動と国際環境

教授 関寛治、助手 森利一、非常勤講師 高島通敏、
研究委嘱 白鳥令、浦野起央、沖野安春、丸山昭、菊地
信雄

本研究班は、昭和四十三年度から「開発途上国の政治変動と国際環境」をテーマとして成立し、メンバーに若干変動があったが、国際政治学と比較政治学との接点の問題について多様な角度からの分析を試みている。方法論としては、データ主義とモデル主義との統合をめざしている。関は、あたらしい国際システムのシミュレーション・モデルを建設し、東京大学大型計算機センターの援助により、一九八〇年代のアジアの国際政治を予測するためのマン・コンピュータ・シミュレーションを継続中であり、かたわら、ほぼ同じシナリオを用いて二十九国

によるゲーミングを二回行ない、それらの比較確認研究を試みようとしており、また、引照国際システムのデータをも蒐集し、国際システムの計量分析を時系列的に行なうために、コンピュータ・プログラムの開発をすすめた。これらの作業の成果の一部を論文として公表した。同時に、「国際体系論の基礎」「危機の深みに立って」「行動科学入門」等を刊行し、分析のための基本的枠組樹立のための理論的思考をすすめた。高島は、一九六五―六七年、エール大学データセンター時代に行なった研究を基礎として、日本の投票行動のデータ分析とその枠組を開発し、いわゆる高島法 (Takahatake Procedure) などの駆使により、日本における計量政治分析の新局面を拓いた。また、この間、「政治の論理と市民」を刊行し、政治学のあり方に対する市民の立場からの論理的問題提起を行なった。白鳥は、投票行動分析を行ない、とくにテレビの影響についての実験装置を工夫し、比較発展の構造では、アゲリゲート・データを縮弱した後、相関分析を行なう方法を開発し、インドの場合に適用したほか、比較発展学の理論的考察をすすめつつある。その成

果は諸論文に結実した。また、「数量政治分析」を編纂した。浦野は、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの現実政治分析に關する資料蒐集を行ない、「ベトナム問題の解剖」「中東紛争の起因と経過」などを刊行した。丸山明は、長年、日本経済の計量分析を行ない、経済的データの処理方法を開発した経験から、この研究班のデータ処理に貢献している。沖野は、比較発展のモデルの諸系列を整理し、それを評価する作業を行なっている。森は、インドについての政党分析、リーダーシップ分析、選挙分析に多くの力を注ぎ、「インド国民会議派におけるリーダーシップ」「インド連邦政府首相選出の決定過程」などの成果をあげた。

二、アジアの農村

教授 大野盛雄、助教授 松井 透、高橋 彰、
研究委員 大岩川和正、友杉 孝

この研究班は昭和四十四年に組織された。その研究課題は、

単位地域社会としての、また生活様式の体系の実現の場としての、農村の構造に関する実証的な研究をつみあげることが手がかかりとして、アジアの社会と文化の現実の姿と発展の方向との理解に近づくことにある。このため、現地のことばを使い、住民の生活に密着して、生のデータを集めるフィールドワークを研究の基礎としている、担当者はそれぞれアジアの各地域において長期間の現地調査に従い、論文・著書等により各個に業績を発表する一方、基本的分析視角・調査方法等に関する討論を重ね、その成果の一部を「アジアの農村」として、刊行した。

大野は、昭和三十七―三十九年、四十一―四十二年(イラク)および四十五年(アフガニスタン・イラン・トルコ)の現地調査にもとづいて、西アジアの農村構造の研究を比較文化論の視角から進め、多数の報告を発表して来たが、とくにイラン農村に関する研究は、「ペルシャの農村」としてまとめられた。

松井はムガルル期のインド農村社会と権力構造のかかわりに関する研究を深め、その成果を発表しつづけているが、人類学者による村落研究の業績を歴史学の観点から再検討するなど、

歴史学における文献研究とフィールドワークにもとづく実証的研究との接点を求めることに力点がおかれている。

高橋は昭和三十三年以降現地調査をくりかえし、フィリピン農村の研究をつづけて来たが、四十六年からは中部ルソンの一村落において再度の長期間住込み調査を始め、地域性と、最近の技術的制度的諸変化のもたらした影響を観察しつつあり、またインド農村に関しては三十九―四十年、四十六年の調査をふまえて、労働力を基軸に農村社会の変容を追求している。

友杉は昭和三十六―三十八、四十三年の北タイ農村の調査につづいて、四十五―四十六年にチャオ・ピヤ・デルタにおいて現地調査を行なった。中部タイ米作農村の変容過程を分析する一方、タイ農村の環境論的考察を進めつつある。

大岩川は昭和三十四―三十六、四十一―四十三年の実態調査の成果を基礎に、パレスチナにおけるユダヤ人入植村の組織的な形成過程の分析を進めてきたが、とくに、現代イスラエルのナショナルな社会形成とそれとの関連を中心として研究を深めつつある。

三、東南アジア研究

助教 山田三郎、高橋彰、助手 池端雪浦

東南アジア地域の社会経済は多様であり、民族文化も多彩である。本研究班は昭和三十九年に組織されて以来、歴史学、経済学、文化人類学、政治学、人文地理学など諸分野からの研究が重ねられてきた。班の共通課題は、昭和四十二年度は「東南アジアの社会と文化」であったが、四十三年度から四十五年度にかけては「東南アジアの国家形成」に移り、更に、四十六年度には「東南アジアの社会経済組織」となった。

橋本は十七世紀のセイロンに関する研究に従い、山本はヴェトナムの土地制度やその国家形成の特質の研究に当った。築島はマレー人とサルタン制に関する研究を行なった後、マレー人における自治の心理を分析し、マレーシアが、諸民族協調の基本方針をもって議会政治を貫いていこうと意図するが、そのさらに奥にあって政治行動をささえ導いているものとして、サルタン制に集約した形であらわれているマレー民族優位への志向

を、とくに五・一三暴動に関連して明らかにした。

和田は、東南アジア華僑社会の変遷を分析した後、マラッカ王国史の研究を行なった。岸は、インドネシアにおける村落の研究、およびインドネシアの民族国家形成とイスラミズムの役割に関する研究も行なった。生田は、近世植民地の東南アジア、とくにマレーシアおよびスマトラにおける国家形成の過程に関する分析を進めた。浦野は、政治学の視点から、東南アジアの比較研究を行ない、その政治的發展の構造を明らかにした。

高橋はフィリピン農村社会研究の一部として、都市と農村をつなぐ結節点であるバヤン（地方町の市街地）の諸相を研究している。従来のバリオ（村落）研究の成果の上に、土地制度、階層性、諸集団、近隣意識等を中心としてバヤン社会の基本的性格を明らかにし、バリオとバヤンの相互関係を動態的に理解しようとして試みている。

池端は、四十三年春、アメリカ合衆国で蒐集した資料をもとに、十九世紀フィリピンの経済変化をあとづけるとともに、フィリピン革命の思想を分析し、それが今日のナショナリズム運

動のなかで果している機能を明らかにした。また近現代史の前提として、前スペイン期のフィリピンの社会構造に関する仕事をまとめた。

山田は、最近における日本の東南アジア経済研究に関するサーベイを行なうとともに、タイでの現地調査に基づいて、農業を中心としたタイ経済の発展過程の研究と雇用・生産性の部門別地域別推移の計測を行ない、更には、農業開発・経済開発論の展開をタイの事例を主にして試みた。

四、近代日本の社会と思想

教授 大野盛雄、非常勤講師 井門富士夫、研究担当
柳川啓一、研究委員 森岡清美、宮川透、生松敬三

本研究では、担当者それぞれの個別研究を通して、近代日本の社会、経済、思想、宗教、言語等の諸問題の解明が試みられており、これらは「近代日本」の諸性格を明らかにするための基礎的な操作といえる。

かつて、本研究班は、社会班とイデオロギー班とのふたつに分れていたが、明治以降の社会の究明には、諸現象の総合的な調査研究が必要であるので、これをひとつの班にまとめ、各分野の相互連関において研究を進めることとした。四十二年には、研究班の再編が行なわれて、「近代日本の思想と宗教」というテーマのもとに、イデオロギー部門の研究が強調され、小口、柳川、井門、森岡が戦後における宗教集団の構造の変化を、また宮川、生松が日本文化論を、丸山が近代政治思想における言語の問題、築島が外国人の日本観を研究テーマにとりあげた。

この「思想と宗教」班の研究は継続されて行なわれたが、四十三年には、これと並行して、「日本の社会とことば」班が組織され、築島を中心に、丸山、野元、碧海、尾上がこれに加わった。この二班による並行的研究体制は四十四年にひきつがれたが、四十五年、「社会とことば」班と「思想と宗教」班は「近代日本の社会と思想」という本来のテーマのもとに統一され、共同研究としての連帯性を強めることとなった。さらに四十六年に至り、大野を中心として、社会とイデオロギーの研究を強

調する方向へと、多少、その性格を変化させた。そして、比較文化の方法を積極的にとり入れ、社会と思想の研究に新局面を開こうとするもので、大野の「アフガニスタンの農村から」はその比較文化的方法による研究の一成果である。

五、明代史の総合的研究

教授 佐但有一、窪 徳忠、鈴木 敬、尾上兼英、助教
鎌田茂雄、講師 戸田禎佑、助手 小林サエ、研究委員
溝口雄三、流動研究員 古原宏伸

本研究班は、研究所の中国研究の構成員が、それぞれの専門領域の研究の上に立ちつつ相互に方法的に関係し合いながら、明代史の総歴史過程を明かにすると同時に、各々の専門領域の研究そのものの発展をも期待しようとするもので、昭和四十五年度から出発した。佐伯は、政治・社会・経済、窪と鎌田は仏道の宗教、尾上は文学、鈴木と戸田と古原は美術絵画、溝口と小林は、儒教およびキリスト教の思想面をそれぞれ担当し、現

段階では、それぞれの領域におけるわが国の研究蓄積を整理し、相互に関連させる方法的模索を行なうために、定期的に研究会を開催し、討論を続けている。今後の計画としては、共同研究の焦点をできるだけ具体的に明確にするとともに、一つの時期もしくは局面で、一つの総合的な歴史像が浮び上るような方向に進めたいと考えている。

六、全真教教理の研究

教授 窪 徳忠、尾上兼英、助教 鎌田茂雄、
助手 蜂屋邦夫、小林サエ

十二世紀の半ばごろに、陝西・山東を中心として成立した、注目すべき教理的特長をもつ全真教団については、その教団史こそ従来からやくわしく研究されているとはいえないものの、その教理面については、いまなおくわしい研究が行なわれていない。その原因のひとつは、全真教の教理が儒・仏・道の三教にわたって、ひとりの力をもってしては理解することの困難

な由があげられる。そこで、各方面の分野の専攻者の参加を求め、昭和四十三年四月より、開祖王重陽の第一の高弟である馬丹陽の「丹陽真人語録」を選び、その輪読を行ない、専攻の分野による解釈を試みた。その成果は、いまだ公表する段階にいたっていないけれども、従来の理解や解釈にいささか付加するところがあったように考えている。

全真教教理の研究に欠くことのできない資料としては、上記のごとき語録類や、王重陽の作とされ、全真教立教の大旨をのべたといわれている「立教十五論」のほか、馬丹陽以下のいわゆる七真人の詩集類があげられる。そこで、つぎに馬丹陽の詩集である「洞玄金玉集」の輪読を行なった。けれども、その詩詞のなかに金丹道関係の用語の類出すること、および詩詞以前に、一層根本的な全真教の思想をさぐる必要があることに想到し、昭和四十六年四月からは、王重陽の「重陽真人金闕玉鎖訣」を講読している。その成果は蜂屋の「重陽真人金闕玉鎖訣について」として発表された。なお、昭和四十五年度の前半には、「莊子集釈」の一部（齊物論）の講読も行なった。

七、旧植民地の研究

教授 佐伯有一、助手 加藤祐三、研究委員 梶村秀樹
 姜徳相、戴国暉、小島麗逸

本研究班は、およそ、アジアを研究するものにとって、わが国の研究の負の遺産ともいふべき、植民地主義の歴史的本質への反省なくしては、その真の研究の出發はあり得ず、しかも、この問題を具体的に明かにすることを怠っても、それは観念的自己満足に墮するであろうことも考慮に入れつつ、未開拓で空白の部分にメスを入れようとする目的で編成された。現段階では、資料の発掘蒐集と問題の所在を明かにする作業を行っているが、佐伯は、中国の東北地区と朝鮮・台湾の植民地ブロック経済（いうまでもなく日本を中心とする）の歴史的性格に究明の的をすえ、加藤は、日本の植民地政策の展開を当面文化面にしぼって研究をすすめ、「学問と植民地支配に関する研究」を発表し、梶村は、朝鮮に対する日本の同化と分断支配の実態、姜は、この植民地支配に対する民族解放運動を追求し、戴は、

台湾における土地調査事業の植民地支配下における役割を明かにしようとし、従来日本における台湾研究の軌跡をほとんど初めて総括的にかつ批判的にサーベイし、清末の台湾における実態究明も行った。また小島は、中国の東北地区における旧植民地労働力の意義と、そのもつ矛盾の究明を行っている。

昭和四十七年度研究計画

一、汎アジア経済

——アジア諸国経済発展と農業——

班主任 山田

- (一) 山田 三郎 アジアにおける農業生産性の比較分析
- (二) 原 洋之助 インドネシア農業の現段階
- (三) 逸見 謙三 アジアにおける農産物貿易
- (四) 鈴木 忠和 東南アジア農業発展の型
- (五) 滝川 勉 フィリピンの経済発展
- (六) 館 齊一郎 後進国における人口増加と経済開発
- (七) 速水佑次郎 東アジア農業の発展過程

三、汎アジア文化人類学

班主任 中根

- (一) 大野 盛雄 生活様式論
- (二) 高橋 彰 人文地理学における地域研究の方法
- (三) 田中 紀彦 日本農業における地域構造の研究

四、東アジア政治・法律

班主任 関

二、汎アジア人文地理学

班主任 大野

——東アジアの国際政治——

- (一) 坂野 正高 近代中国における外交官・陸海軍士官養成の

構想

(一) 衛藤 藩吉 一九四九年以降の日中交渉史

(二) 藤井 昇三 ワシントン体制崩壊期の国際政治と国内政治の連関

の連関

(四) 関 寛治 第二次大戦後における東アジア国際政治構造の変動過程

の変動過程

五、東アジア歴史

班主任 佐伯

——東アジアにおける変革とその歴史の基盤——

(一) 松丸 道雄 殷周時代の社会と国家

(二) 関野 雄 先秦時代の経済機構

(三) 西嶋 定生 東アジア世界の形成

(四) 池田 温 中国律令と東アジア

(五) 武田 幸男 朝鮮の律令制

(六) 柳田 節子 宋代における労働力の特徴

(七) 佐伯 有一 明清期の権力構造

彙 報

(四) 田中 正俊 世界史における中国産業構造の特徴

(五) 古島 和雄 現代中国における民衆運動と統一戦線

(六) 菅沼 正久 中国の社会主義建設の提起する諸問題

(七) 梶村 秀樹 朝鮮現代の経済政策と東アジア

六、東アジア美術史・考古学

班主任 鈴木

——宋元仏画研究——

(一) 鈴木 敬 宋元仏画の表現形式について

(二) 川上 涇 宋元仏画中にみる山水表現の研究

(三) 戸田 禎佑 宋元仏画における花鳥表現の研究

(四) 海老根聰郎 宋元の禅宗絵画

七、東アジア哲学・宗教

班主任 窪

——中国の思想と宗教——

(一) 泰本 融 中国の論理思想と仏教論理学説

(二)塩入 良道 中国における禅觀思想

(三)鎌田 茂雄 唐代における仏教と道教

(四)蜂屋 邦夫 儒仏との關係における全真教教理の研究

(五)窪 徳忠 元代における三教關係

八、東アジア文学

班主任 尾上

(一)溝口 雄三

小林 サエ

尾上 兼英

田仲 一成

伝田 章

青山 宏

(二)高田 淳

丸山 松幸

丸山 昇

三宝 政美

尾上 兼英

明清時代の思想と文学

近現代の思想と文学

九、南アジア政治・経済

班主任 荒

——インドにおける支配体制と社会構造——

(一)山崎 利男 古代インド社会の変貌

(二)荒 松雄 インドにおける宗教と政治・社会

(三)松井 透 イギリス植民地支配とインド社会

(四)山崎 利男 英領インドにおける司法制度

(五)長崎 暢子 イギリス支配下の民族形成と政治権力

(六)中村 平次 現代インド政治における分化と統合

——政党政治の消長をめぐって——

(七)鈴木 斌 インド・パキスタンのムスリム社会

十、西アジア歴史・文化

班主任 深井

(一)松谷 敏雄 イラン高原における初期農耕村落

(二)黒田 和彦 ハンムラビ時代の社会と文化

(三)深井 晋司 パルティア・ササン朝美術の特質

西アジアの中世イスラム社会
西アジヤの中世イスラム社会
中世イスラームの神秘思想

共同研究

A 新興諸国の政治変動と国際環境 班主任 関

(一)高島 通敏 政治変動の計量分析 ——その一——

(二)関 寛治 政治変動の計量分析 ——その二——

(三)白鳥 令 新興諸国における政治発展の概念と理論

(四)沖野 安春 比較政治学における政治発展論の系譜

(五)浦野 起央 アジア・アフリカ・ラテンアメリカの政治変

動の比較

(六)森 利一 政治変動、政治的近代化、政治発展

——インドのケース——

(七)萩原 宣之 マラヤのコミュニズムと階層分化

(八)高柳 先男 国際政治と比較政治のリンクエッジ現象の分析

B アジアの農村

班主任 大野

(一)大野 盛雄 西アジアの農村

(二)高橋 彰 東南アジアの農村

(三)松井 透 インドの農村

(四)大岩川和正 イスラエルの農村

(五)友杉 孝 タイの農村

(六)佐藤 次高 エジプトの農村

(七)江波戸 昭 アジア農村の地理学的研究

(八)荻口 善美 インド・バングラの農村

C 東南アジアの社会経済組織

班主任 高橋

(一)高橋 彰 農業における技術発展と社会経済制度

——いわゆるグリーンレボリューションを中心に——

(二)山田 三郎 タイの経済組織

(三)原 洋之介 インドネシア農村における共同体

D 近代日本の社会と思想

班主任 大野

(一)大野 盛雄 農業・農村に関する日本の価値観

(二)柳川 啓一

井門富士夫

戦後における宗教集団の変化

森岡 清美

(三)宮川 透

日本文化と価値意識

生松 敬三

E 旧植民地の研究

班主任 佐伯

(一)佐伯 有一 ブロック経済の史的性格

(二)梶村 秀樹 同化と分断

(三)姜 徳相 三一運動論

(四)戴 国輝 台湾における土地調査事業

(五)小島 麗逸 満州における労働力問題

(六)加藤 祐三 植民政策の系譜

G 全真教教理の研究

班主任 窪

(一)小山 正明 明代国家権力と村落支配

(二)尾上 兼英 小説盛行の基盤

(三)田仲 一成 明代演劇の研究

(四)溝口 雄三 明末に生きた李卓吾

(五)小林 サエ 「清代禁書」における陽明学の影響

(六)鈴木 敬 吳派文人画の成立

(七)戸田 禎佑 明末董其昌様式の変容

(八)窪 徳忠 浄明道と全真教

(九)鎌田 茂雄 明代の仏教

F 明代史の総合研究

班主任 佐伯

(一)佐伯 有一 明末清初の社会構造

窪 徳忠

蜂屋 邦夫

尾上 兼英

鎌田 茂雄

小林 サエ

附屬一 西アジアにおける先史・歴史遺跡の研究

班主任 深井

(一)池田 次郎 古代西アジアの人種問題

(二)堀内 清治 古代西アジアにおけるドーム建築

(三)増田 精一 イラン高原における彩文土器の文化

(四)深井 晋司 ターク・イ・ブスターンの諸問題

(五)杉山 二郎 ササン朝ペルシアの文様について

附屬二 西アジア農村の実証的(人文地理学的)研究

班主任 大野

(一)大野 盛雄 村落構造の研究

(二)勝藤 猛 西アジア農村の歴史的背景

(三)安部 喜也 土地および水利利用の研究

(四)加納 康彦 西アジアにおける家畜の生態に関する研究

所員動靜

山崎 利男 インド・イギリス・西ドイツ

インド古代史・ヒンドゥー法の研究

(四六・一〇・一七)四七・八・一六)

青木 保 タイ

文化人類学的研究

(四七・三・二〇)四八・九・三〇)

江島 恵教 西ドイツ

サンスクリット仏教写本の研究

(四七・三・二七)四八・三・三一)

窪 徳忠 アメリカ・メキシコ・コロンビア・ペルー・チリ・アルゼンチン

道教を中心としてみた諸宗教の比較研究

(四七・六・一)四七・六・二四)

韓国・中華民国・香港・マカオ

道教儀礼の調査

(四七・九・二〇)四七・一〇・一八)

香港

道教儀礼の調査

(四八・一・一七)四八・三・五)

大野 盛雄 イラン

西アジア農村の人文地理学的調査

(四七・六・一八)四八・一・二)

池端 雪浦 フィリピン

フィリピン史の研究

(四七・六・二五)四八・九・三〇)

中村広治郎 イラク・イラン

中世イスラムとの連続性の中でみた西アジアに

おける現代イスラムへの動向について

(四七・七・二)四七・一一・二〇)

関 寛治 マレーシア

マラヤ大学において日本研究講座の講義・他

(四七・八・一八)四八・三・三一)

鎌田 茂雄 韓国・中華民国・香港・マカオ

道教儀礼の調査

(四七・九・二〇)四七・一〇・一八)

香港

道教儀礼の調査

(四七・一二・一〇)四八・一・二六)

松丸 道雄 京都大学

日本學術振興會流動研究員

(四七・四・一)四八・三・三一)